16　　弓の名人　 　　　　　　　　　　　　　　　　 文法　助詞②　接続助詞①

読解 評価の対象をつかむ

むつるのの（警備を担当する役人）が、たう（トキ）の羽を探し求めていた。

といふ弓の上手聞きて、｢この辺にたうやは見候ふ。見よ」と言ひけれⓐば、下人立ちでて見て、｢ただ今、河より北の田には見候ふ」と言ふを聞きて、㋐すなはち弓矢を取りて出でたるに、たう立ちて南へ飛びけるを、上六、矢をはげて、さうなくも射ず。｢いづれかはこがれたる」と言ひけれⓑば、｢しりに飛ぶをこがれたる」と言ふを聞きて、なほも急がず。はるかに遠くなりて、河の南の岸の上飛ぶほどになりにける時、よく引きて放ちたるに、あやまたず射落としてけり。①むつる感興のあまり、②不審をいたして問ひけるは、｢㋑など近かりつるをば射ざりつるぞ。はるかに遠くなしては射るぞ。心得ず」と尋ねければ、｢その事候ふ。近かりつるを③射落としたらば、河に落ちて、その羽れ侍りなむ。向かひの地につきて④射落としたればこそ、かく羽は損ぜね｣とぞ言ひける。

心にまかせたるほど、まことに⑤ゆゆしかりける上手なり。

* 語注

矢をはげて＝弓に矢をつがえて。

こがる＝切望する。強く望む。

【原文】

上六大夫といふ弓の上手聞きて、｢この辺にたうやは見候ふ。見よ」と言ひければ、下人立ち出でて見て、｢ただ今、河より北の田には見候ふ」と言ふを聞きて、すなはち弓矢を取りて出でたるに、たう立ちて南へ飛びけるを、上六、矢をはげて、さうなくも射ず。｢いづれかはこがれたる」と言ひければ、｢しりに飛ぶをこがれたる」と言ふを聞きて、なほも急がず。はるかに遠くなりて、河の南の岸の上飛ぶほどになりにける時、よく引きて放ちたるに、あやまたず射落としてけり。むつる感興のあまり、不審をいたして問ひけるは、｢など近かりつるをば射ざりつるぞ。はるかに遠くなしては射るぞ。心得ず」と尋ねければ、｢その事候ふ。近かりつるを射落としたらば、河に落ちて、その羽濡れ侍りなむ。向かひの地につきて射落としたればこそ、かく羽は損ぜね｣とぞ言ひける。

心にまかせたるほど、まことにゆゆしかりける上手なり。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

〔　　　　〕がトキを射ることにしたが、すぐには射ず、トキが〔　　　　　　　　　　　　〕なってから射落とした。このことを〔　　　　〕に思ったむつるがその理由を尋ねると、上六はトキの〔　　　〕を傷めないためだと答えた。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ・ⓑの用法として最も適当なものを選べ。〈３点×２〉

ア　仮定条件（…ならば）

イ　確定条件・原因理由（…ので）

ウ　確定条件・偶然条件（…ところ）

エ　確定条件・恒常条件（…といつも）

ⓐ〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕

問四　傍線部①とあるが、どのようなことに対して言っているのか。最も適当なものを選べ。〈６点〉

ア　探し求めていたトキの羽が手に入ったこと。

イ　トキを射る場合だけ違った方法をとったこと。

ウ　遠くのトキを射落とす見事な腕前を見せたこと。

エ　トキに対して慈悲深い態度をとったこと。

〔　　　〕

問五　傍線部②とあるが、「上六」のどのような点を「むつる」は「不審」に思ったのか。二十字以内で答えよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部③・④を接続助詞「ば」の用法に注意して現代語訳せよ。〈５点×２〉

③〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

④〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七　傍線部⑤とあるが、これは筆者の何に対する感想か。最も適当なものを選べ。〈10点〉

ア　同じ弓矢を扱うことを仕事としていながら、向こう岸についたトキを射ぬく「上六」の腕前を心から称賛する「むつる」の素直さ。

イ　「上六」の思慮深さを理解できずに、腕前はあるにもかかわらず、思いつくままに軽々しく行動する「むつる」のいとわしさ。

ウ　すでに素晴らしい弓の技術を持ちながら、さらに技量を高めるためにあえて遠くのトキを射る「上六」の向上心。

エ　羽を傷つけないために、射落としやすい近距離からではなく、わざわざ向こう岸についた後でトキを射る「上六」の自信。

〔　　　〕【解答】

問一　上六／はるかに遠く／不審／羽

問二　㋐＝すぐに　㋑＝なぜ〈４点×２〉

問三　ⓐ＝イ　ⓑ＝ウ〈３点×２〉

問四　ウ〈６点〉

問五　トキが遠くまで飛んでから射落とした点。（19字）〈10点〉

問六　③＝射落としたならば、

　　　④＝射落としたので、このように羽は傷まない。〈５点×２〉

問七　エ〈10点〉

【現代語訳】

上六大夫という弓名人が（その話を）聞いて、「この辺りでトキは見かけますか。見てこい」と言ったので、下人が立ち出て見て、「たった今、川から北の田には見えてございます」と 　　　　 （下人が）言うのを（上六が）聞いて、すぐに弓矢を手に取って出たが、トキが飛び立って南へと向かったのを、上六は、矢をつがえて（いながら）、すぐには射ない。「（今飛んでいるうちで）どれを望んでいるのか」と（むつるに）言ったところ、「一番最後に飛ぶトキを望んでいる」と　　　　　 （むつるが）言うのを （上六が）聞いて（いながら）、やはり急がない。 （トキが）はるか遠くになって、川の南岸上を飛ぶくらいになってしまった時に、（上六は）十分に弓を引いてはなったところ、失敗せずに射落としてしまった。むつるが感じ入っておもしろがるあまり、不思議に思って尋ねたことには、「なぜ近かった時の（トキ）を射なかったのか。はるか遠くにして射るのか。理解できない」と尋ねたところ、（上六は）「その事でございます。近かったのを射落としたならば、川に落ちて、その羽がきっと濡れるでしょう。向こう岸について射落としたので、このように羽は傷まない」と言った。

　気負いのない様子が、まことに素晴らしかった弓の名手である。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「この辺にたうやは見候ふ」（１行目）を現代語訳せよ。

問２　「心にまかせたる」（10行目）とは、誰の、どのような様子のことを指しているのか。

【補充問題解答】

問１　この辺りでトキは見かけますか

問２　上六大夫の、羽を傷めずに手に入れるため、落ち着いてトキを射る様子。